
蜻蛉が鷹に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜻蛉が鷹に

【Nコード】

N4253V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

浜尾は終戦間際日本の空を我がもの顔で飛び回るアメリカ軍の航空機を悔しい想いで見ていた。だがその彼が自衛隊に入り。こうしたパイロットの人は実際に多かつたかも知れません。

第一章

蜻蛉が鷹に

最早だ。日本の敗戦は誰が見ても明らかだった。

空に飛ぶのはアメリカ軍のものばかりだった。今日は昼からだっ
た。

「くそつ、またグラマンかよ」

「いつもいつも来やがって」

艦載機がだ。日本軍、海軍の航空基地に来てだ。そうしてだった。
滑走路や格納庫に機銃掃射を浴びせてだ。悠々と帰っていくのだ
った。

夜になれば今度はあの爆撃機が来るのだった。

「B29か」

「毎日よく来るな」

「派手に爆弾やら機雷やら落としていきやがって」

「胸糞悪い奴等だ」

「何もできないのかよ」

「この言葉が出た。」

「俺達はもうな」

「無理か？」

「もう飛べる飛行機ないのかよ」

「あるにはあるぜ」

まだ着任したばかりのだ。子供と言っていいパイロット達がこつ
話していた。彼等は予科練からパイロットになったのである。

「あの二枚羽根な」

「おい、練習機じゃないか」

「そんなのしかないのかよ」

「零戦とか紫電とかないのかよ」

「もうないよ」

もう、なのだった。以前はあつたというのだ。

「全部。撃ち落とされるか離陸前にやられただろ」

「この基地のはかよ」

「他の基地もだよ」

つまり日本の殆どの基地がそうであった。

「もうな。戦闘機も爆撃機もないさ」

「じゃあ俺達はもう戦えないのかよ」

「あの連中と」

「ああ、無理だよ」

今は夜だ。上空を悠々と飛ぶB29が地上からの灯りに照らされている。異様なまでに巨大な姿だ。

「あのデカブツだってもうな」

「飛ばせるだけかよ」

「奴等の思うままにか」

「そうだよ。どうしようもないさ」

これが答えだった。

「俺達はな」

「負けるか、やっぱり」

「もうな」

そしてだ。この言葉が出された。

「それは避けられないだろうな」

「そうか、やっぱりな」

「じゃあもう」

「俺達は」

「日本は終わりか」

そしてだ。この言葉が出された。

「もうな」

「しかしな」

ここだ。彼等の中で一番背の高い男がいった。

目の光が強い。顔は細くそして痩せている。坊主頭でありその髪

が多い。その彼がだ。ここで仲間達にこつ話すのであった。

「若しもだ」

「若しも？」

「若しもというと？」

「俺達が生き残ったらだ」

その時はどうするかというのだ。

「その時はだ」

「ああ、その時はか」

「戦うんだな」

「空で戦う」

これが彼の言葉だった。

「浜尾壮介はそうする」

「そうか。御前は戦うんだな」

「絶対に」

「そうする。何があってもな」

浜尾はだ。こつ仲間達に話すのだった。そしてだ。

第二章

仲間達にだ。こつ問うのだった。

「貴様等はどつするんだ？」

「生き残ればか」

「その時はか」

「どつするかだな」

「ああ、その時はどつするんだ」

あらためてだ。彼等に問うた。

「戦つか？どつするんだ？」

「そつだな。何かの形でな」

「そつする」

「それじゃあな」

こつ話してだった。そのうえでだった。

彼等は敗れようとしているその時を過ぎた。そして。

日本はだ。遂に敗れてしまったのだった。八月十五日を迎えた。

そつしてだ。海軍も陸軍もだった。解体されることになった。

彼等は全員生き残った。しかしだった。

空虚なものになった飛行場だった。敗戦と解体の決定によつてだ。

彼等の心自体が空虚なものになっていた。その中でのことだった。

「もうな。軍隊は必要ないらしいな」

「海軍も陸軍もな」

「当然航空機もな」

「いらぬそつだ」

彼等は自分達の隊舎の中で話すのだった。粗末なベッドだけがあ
る木造のその建物の中だ。

「もうな」

「じゃあどつする？」

「俺達はな」

「一体どうするんだ？」
「それで」
「もうどうしようもないだろ」
「一人が言った。」
「こっぴなったらな」
「軍隊がなくなるんだからな」
「じゃあ俺達は戦えないか」
「二度とな」
「いや」
しかしだった。これまで黙っていた浜尾がだ。「こっぴ言っのだった。」
「俺はまだ」
「諦めないのか？」
「戦うのか？」
「軍は解体されるのに」
「それでもか」
「若し機会があれば」
「どうかというのだった。」
「俺はやっぱりな」
「戦うのか？」
「やっぱり」
「ああ、それも空で戦う」
これが彼の考えだった。自分のベッドに座ってだ。そのうえで話すのだった。
「奴等の空でな」
「その空でか」
「戦うんだな」
「ああ、戦う」
これが彼の言葉だった。
「何があってもな」
「そうするか」

「絶対になんだな」

「これからどうなるかわからない」

やはり彼も軍の解体に動揺していた。そしてだった。

それでもだった。彼は言うのだった。

「けれどそれでもな」

「戦う機会があればか」

「絶対にだな」

「なあ、俺達はな」

ここだ。彼はこう話すのだった。

「最初は蜻蛉だったな」

「蜻蛉か」

「ああ、そうだな」

「そういえばな」

仲間達もだ。蜻蛉という言葉に応えた。日本軍の練習機は赤く塗装されていたのでそれでだ。赤蜻蛉と言われていたのである。

第三章

それでだ。彼等もまた蜻蛉という言葉に反応したのだった。

「言われてたな」

「まだまだひよっこだからな」

「結局のところはな」

「けれどな」

それでもだというのだった。

「俺達はそれでもな」

「ああ、パイロットだ」

「それは間違いないからな」

「だからだ。俺はだ」

浜尾はだ。また話すのだった。

「蜻蛉からな」

「蜻蛉から？」

「どうなるっていうんだ？」

「それで」

「鷹になる」

そうなるというのである。

「そして戦う」

「そうするんだな」

「やっぱりそうなんだな」

「貴様等はどうするんだ？」

「まだだ。こつ問うのだった。」

「それで」

「俺は実家で農家を継ぐさ」

「俺は漁師な」

「まずは二人が言った。」

「俺は工場で働く」

「俺は警官になる」
「そうか。じゃあ俺だけになるのか」
浜尾は仲間達の行く先を知ってまた述べた。
「戦うのは」
「悪いな、親の跡を継がないとな」
「だからな」
「それはな」
「いいさ。人それぞれだ」
そうしたことについてだ。とかく言うまで彼は狭量ではなかった。
そしてだった。
「それはな」
「それでとりあえず貴様は」
「どうするんだ」
「実家に帰って畑仕事をしながら待つ」
「こう仲間達に答えるのだった。」
「そうする」
「そうか、待つか」
「ここは」
「幾らでも」
「天命があれば」
浜尾はまた言った。
「その時は絶対に来るからな」
「それでか」
「わかった。それならな」
「待つんだな」
「そうだ、待つ」
浜尾の言葉がさらに強いものになる。
「そして俺は今度こそな」
「アメリカに勝つんだな」
「絶対に」

「そうする。今は蜻蛉でも」

自分をだ。こう例えるのだった。その練習機でだ。

「それでもだ。やがてはな」

「何にならんだ」

「それで」

「鷹だ」

それだというのだ。

「俺は鷹になる。絶対にな」

「そうか。鷹になってか」

「勝つんだな」

「アメリカに」

「そうする。何があってもな」

こう誓うのだった。そうして彼は実際にその時を待った。

するとだ。天命は彼を導いたのだった。

「警察予備隊か」

「ああ、そうなんだ」

「そういうのができるらしいんだ」

「こうだ。実家で農業に従事していた彼に近所の者達が話すのだった。

「まあ名前は違うがな」

「かつての軍隊の人間に来てくれって言ってるしな」

「実際は軍隊だよ」

「そうした組織だよ」

「わかった」

それを聞いてだ。浜尾は言うのだった。

第四章

「じゃあ俺はそれに入るな」

「入るか」

「やっぱりそうするんだな」

「そうする。待っていた」

言葉が強い。その言葉は決意そのものだった。

彼は実際に警察予備隊に入った。無論元予科練であることを言うてだ。すると彼はだ。入隊してすぐにこう言われたのであった。

「パイロットですか」

「そうだ、いいな」

「空の方でいいな」

「そちらで」

「はい」

パイロットと言われてだ。満足した顔で頷いた。

「それになりたくて来ましたから」

「そうか、それならな」

「頼んだぞ」

「ええ。ただ」

ここぞだ。彼は寂しそうに言うのだった。

「アメリカは敵じゃないんですね」

「味方だよ」

「今度はな」

彼等もまたかつて軍の人間だった。だからその言葉には微妙なものがあった。あの激しい戦いのことは忘れられなかった。

「だから戦うことはない」

「今はな」

「それは考えていませんでした」

浜尾はこのことは残念に思っていた。

「俺、いえ私はです」

「気持ちわかるがな」

「だがそれでもだ」

「君のその腕は必要だ」

「日本にとつてな」

「わかりました」

祖国の名前を出されるとだった。彼も頷くしかなかった。

そうしてだった。彼はまた空を飛ぶことになったのだった。

警察予備隊はすぐに保安隊になり自衛隊になった。浜尾は航空自衛隊のパイロットになった。階級はすぐに一等空尉になったのだった。

「つまりこれは」

「そうだ、大尉だ」

「昔で言えばな」

「将校だ」

それだとだ。乗艦達が彼に話す。彼も上官達も青いスーツの軍服である。かつての予科練の七つボタンでも海軍の詰襟でもなかった。

「今は幹部だがな」

「その呼び方だがな」

「私が将校ですか」

浜尾はあえて将校と呼んだ。

「兵学校も出ていないのにすぐに」

「アメリカじゃパイロットは将校だからな」

「それでだよ」

「アメリカ、ではですか」

浜尾はアメリカと聞いてだ。また微妙な顔になった。

「ここは日本なのにですね」

「自衛隊はアメリカ軍をモデルにしているからな」

「それは仕方が無い」

「そういうことだよ」

「そのアメリカの、ですね」

アメリカへの敵愾心は消えてはいなかった。それはあの時のままだった。

しかしそれは何とか隠してだ。彼は今言うのだった。

「そういうことですか」

「そうだ。しかしだ」

「それでもだ」

「頼んだぞ」

「わかっています。それで機体もですね」

彼が今乗っている機体はだ。それもまた。

第五章

「アメリカの」

「セイバーだ」

「それだ」

「いい機体です」

それは浜尾も認めた。

「日本軍の戦闘機とはまた違ったよさがあります」

「そうだな。それでだが」

「いいだろうか」

ここで上官達の言葉が変わってきた。

「今度新たな部隊が新設される」

「ブルーインパルスといつてな」

「ブルーインパルス」

その聞き慣れない言葉を聞いてだ。浜尾は眉を顰めさせた。

「何ですか、それは」

「航空ショーを行う部隊だ」

「そのセイバーを使ってな」

「ショーですか」

「そうだ、国民に見てもらい楽しんでもらう為のな」

「そうした部隊だ」

「それはまた」

その話を聞いてだ。浜尾は眉を顰めさせたまま言うのだった。

「変わった部隊ですね」

「しかしそれには相当な技量が必要だ」

「色々なアクロバットな技を国民に見せるからな」

「それでだ」

「君にその部隊にだ」

「入ってもらいたいのだが」

「見せる部隊ですね」

浜尾もここで言った。

「私に」

「君にはその技量がある」

「だからだ」

「それで、ですか」

「そこに行ってもらいたい」

「いいか」

また彼に告げた。そしてだ。

彼にだ。決断を促すのだった。

「それでどうするのかね」

「君は」

「私はです」

彼はだ。考える顔であった。そうしてであった。

その考える顔でだ。こう上官達に対して告げた。彼も決断したのだ。

「アメリカともう一度戦う為にここに来ました」

「自衛隊に」

「そう言うのだな」

「はい」

その通りだというのだ。

「しかしです。私は自衛官です」

「それならば」

「そう言ってくれるか」

「はい、そうです」

その通りだというのである。彼はだ。

「ですから。ブルーインパルスに行かせてもらいます」

「うむ、それではだ」

「頼むぞ」

こうしてであった。彼はブルーインパルスに入隊することになっ

た。彼は空で戦う戦士から空で曲芸を見せる男になったのである。

その彼の腕はだ。見事なものであった。伊達に参加を促されたわけではなかった。

「凄いな」

「ああ、連続宙返りか」

「それも地面すれすれでやるか」

「あんなことできるなんてな」

「あのパイロット凄いぞ」

こうだ。観ている者達が驚きの顔で言うのであった。

「自衛隊ってあんなパイロットいるんだな」

「アメリカ軍と比べたら全然落ちるって思ってたけれどな」

「意外とやるか？」

「そうだよな」

こう言われるのだった。そしてだ。

このことはだ。浜尾の耳にも入った。彼に同僚達が話してきたのだ。

「浜尾さん凄い評判になってますよ」

「もう腕が半端じゃないって」

「空自にもあんなパイロットいたんだって」

「言われてますよ」

「そうか」

このことだ。浜尾はにこりともせずに応えたのだった。

第六章

「それはいいことだな」

「それでアメリカ軍にも負けていないって」

「それも言われてますよ」

「そうした風にも」

「何っ、それは本当か？」

この言葉にはだ。彼は反応を見せたのだった。

「本当にそう言われてたのか」

「はい、そうです」

「その通りです」

「そう言われていますよ」

同僚達いだ。その彼にまた話した。

「アメリカ軍のパイロットにも」

「負けていないって」

「それはいいことだな」

ここでだ。彼は笑みになって話すのだった。

「アメリカに負けていられるか」

「ですよ。俺達だって国を守ってるんですから」

「だったらアメリカ軍にもですな」

「負けていられませんよ」

「本当に」

「曲芸でも何でも負けてたまるか」

これが今の彼の考えだった。

「いいな、俺達は負けないからな」

「ええ、じゃあまた練習しますか」

「これから練習ですしね」

「今からまた」

「月月火水木金金だ」

海軍時代の言葉をだ。ここで出すのだった。

「訓練あるのみだ」

「そうしてですよね」

「やっぱりよくなりますよね」

「訓練あつてこそ」

「そういうことだ。隊長もそう仰ってるな」

「はい」

そうだというのだった。彼等もまたかつて海軍や陸軍にいた。だから軍の感覚をまだ残してだ。そのうえでやり取りをしているのだ。つた。

「もつともつと練習をするぞと」

「仰ってます」

「そういうことだ。やっていくぞ」

浜尾はすぐにヘルメットを被りだった。自分の機体に向かうのだ。つた。

そしてその後に同僚達が続く。彼等は日々練習を続けていた。

そんな中でだ。浜尾にだ。司令がこう話してきた。

「アメリカ軍とですか」

「そうだ、共同でな」

「シヨーを行うのですか」

「上の方でそう決定した」

司令はこう話すのである。

「そうな」

「そうですか」

「それでだ」

そのことを話したうえでだ。司令はまた浜尾に言うてきた。

「君はどう思うか」

「私ですか」

「まだアメリカが嫌いだな」

このことをだ。具体的に問うたのである。

「そうだな」

「否定はしません」

そしてだ。浜尾もこう返した。

「それは」

「そうだな。やはりな」

「しかしです」

「しかしか」

「任務とあらばです」

構わないというのである。浜尾はここでも自衛官、もつと言えば軍人であった。そうした意味で彼は生粋の軍人であると言えた。

第七章

「喜んで」

「そうか。そう言ってくれるのだな」

「しかし。曲芸で、ですか」

「元々我が国のブルーインパルスはあちらさんを参考に行っているからな」

「そうですね。それは」

これはブルーインパルスだけではなかった。自衛隊全体がであった。自衛隊はアメリカの考えや形式がかなり取り入れられているのである。

「それでだ。共同でショーを行いだ」

「お互いに学び合うというのですね」

「そういうことだ。我々にとって得られるものは大きい」

「その通りです」

「ではだ」

ここまで話してだ。司令は浜尾を見てまた告げた。

「頼んだぞ」

「はい」

浜尾は敬礼で返した。その敬礼は海軍の折り畳んだものではなかった。空軍の、陸軍のそれと同じ広げたものであった。その敬礼で返したのだった。

そうしてだった。ショーの日になった。そこにおいてであった。

「いよいよかあ」

「アメちゃんと一緒にやるのか」

「とはいってもアメちゃんが見せた後で俺達がやるのか」

「そうなるんだな」

「そうだ」

その通りだと。浜尾は仲間達に話した。

「俺達が二番目だ」
「それって何か癪ですよね」
「そうですね」
「ここは日本なのに」
「それは」
「仕方ないとは言いたくないがな」
「浜尾はだ。やはりこう言うのだった。」
「どうしてもな」
「ですよ。負けたとはいえ」
「日本なんですから」
「やっぱり」
「そうだ。しかしだ」
「ここでだ。浜尾はその言葉を変えてきた。そうして言うのだった。」
「負けはしないぞ」
「奴等以上の曲芸を見せますか」
「ここは」
「ああ、見せてやる」
「こうだ。強い声で言うのである。」
「絶対ににな」
「ですよ。それじゃあ」
「出番が来ればですね」
「やりますか」
「やるぞ。絶対ににな」
「こうしてだった。彼は決意したのだった。そしてだ。」
「負けてたまるか」
「こうも言った。あの敗戦の時のことはだ。決して忘れてはいなかった。」
「そしてだ。アメリカ軍のショーがはじまった。それは。」
「おお、凄いな」
「ああ、あんなことできるんだ」

「天才じゃない？」

「だよねえ」

こうだ。観客達の多くが唸った。見ればだ。

彼等は赤や青や黄色の飛行機雲を出しながら飛びだ。宙返りに反転、それにチームワークを使った見事な操縦を見せていたのだ。

そうしたものを見てだ。観客達は言うのだった。

「やっぱりアメリカ軍だよな」

「ああ、凄いよ」

「あんなこと自衛隊には無理だよな」

「絶対にな」

彼等はアメリカ軍の方が凄いと思っていたのだ。日本を破ったアメリカ軍の方がだ。既に勝負ありだとだ。多くの者が確信していた。そうしてアメリカ軍のショーが終わった。その時は凄まじい歓声が場を支配した。

「凄いぞ！」

「やっぱりアメリカだよ！」

「格好いいよな！」

「いやあ、いいもの見たよ」

「全くだよ」

こう口々に言う。だがそれを見てだ。

第八章

浜尾はだ。仲間達に言うのだった。

「あの歓声をな」

「俺達に向かわせますか」

「そうしますね」

「絶対に」

「ああ、絶対にな」

そうするといつのであった。

「あれ以上の歓声にするぞ」

「ええ、じゃあ」

「行きましよう」

「是非」

こうしてだった。彼等はショーに向かうのだった。そうしてそれぞれの機体に取り込みだ。空に飛び立つのであった。そこからだった。

浜尾はだ。通信で隊長に言った。

「隊長、ここはです」

「ああ、あれをやるんだな」

「ここはあれしかありません」

こう彼に言うのであった。

「それでいいですか」

「そうだな。負けていられないからな」

隊長もだ。負けん気があった。自衛官としてだ。

それでだ。隊長も言うのだった。

「じゃあな」

「はい、やりましよう」

こうしてだ。ブルーインパルスはだった。

まずは急上昇してだ。それから。

一機ずつ横に連なりだ。そこから一機、また一機と横にスライドしていく。そうしてそれぞれの色の煙を出していくのだった。

それからだ。宙返りに次ぐ宙返りを見せるのだった。

「おいおい、やるなあ」

「自衛隊も」

「思った以上にな」

「やってくれるな」

観客達はその動きを見て言う。

「結構以上にな」

「凄いよな」

「ああ、大したことないって思っていたけれどな」

「それでもな」

「けれどな」

しかしだ。ここでこうも言われるのだった。

「まだこれ位じゃな」

「ああ、アメリカ軍もつと凄かったよな」

「もっと派手にやってたしな」

「そうだったよな」

こうしてだ。アメリカ軍よりは落ちると言われた。だが。

ここでだ。浜尾が隊長に言われた。

「浜尾一尉」

「はい」

「あれをやるぞ」

「わかりました。それじゃあ」

「やるぞ」

こうしてだった。彼等は超低空飛行に入るのだった。

地面すれすれに飛んでだ。そうして。

そこから宙返りに反転、きりもみ飛行をしてみせるのだった。

「おいおい」

「一歩間違えたら地面に激突だぞ」

「それするか？」

「ああして」

これはだ。アメリカ軍もしないことだった。

「それをするかよ」

「自衛隊徹底してるな」

「ああ、あそこまでやるか」

「これは」

そしてだ。遂にこの評価が出た。

「アメリカ軍超えてるな」

「そうだな、あれは」

「もうな」

「確実にな」

こう言われるのだった。そして。

浜尾がだ。また隊長に言われた。

「最後は御前が締めろ」

「了解」

隊長の言葉に心えてだ。すぐにであった。

滑走路のところに来てだ。何と。

滑走路すれすれの高さに飛んでみせる。そこできりもみ回転に宙返りをしてみせてだ。一瞬だけ着地してそこからまた急上昇してみせてまた着地してみせたのである。

そこからまた飛ぶ。それを見てだった。

第九章

観客達はだ。言葉を失った。

「すげえ……」

「あのパイロット凄いよ」

「あれが自衛隊か」

「あんなパイロットがいるんだな」

「あれは」

そしてだ。この言葉が出された。

「アメリカ軍より凄いな」

「ああ、完璧だよ」

「あんなパイロットいたのか」

「自衛隊凄いで」

観客達はアメリカ軍に対するのよりも唸っていた。そうして終わった時にだ。

最高の歓声だ。彼等を包んだのだった。

「最高だよ！」

「自衛隊凄いよ！」

「そこまでできるなんてな！」

「よくやったよ！」

この歓声を聞いてだ。それぞれの機体から降りてだ。彼等は満足した笑みを浮かべていた。

そうしてだ。彼等はその笑顔で言い合うのだった。

「やったな」

「そうだな」

「自衛隊の面目躍如だ」

「俺達だってやれるんだ」

「こうしてな」

「当然だ」

「ここでだ。浜尾がこう言った。

「これもな」

「当然ですか」

「そうなんですか」

「俺達にも意地がある」

「その意地がだというのだ。」

「何としてもやるうというな」

「そうですね。負けていられませんからね」

「アメちゃんにも」

「彼等もだ。意地と言われるとわかるのだった。」

「我が国を守るのは俺達ですし」

「自衛隊ですしね」

「あの時のことは忘れない」

「浜尾はこんなことも言った。」

「絶対にな」

「敗戦の時ですね」

「あの時ですよね」

「俺達だってそうですし」

「彼等もだ。あの時代に生きていた。陸軍の者も多い。だから」
「そだ。浜尾の今の言葉はよくわかるのだった。彼と同意であるのである。」

第十章

「それならですね」

「アメリカには」

「あの時俺はほんのひよっこだった」

浜尾は敗戦のその時のことも話した。

「蜻蛉だった」

「蜻蛉でしたか」

「あの時は」

「しかし今はどうか」

その今の話をするのだった。話はそこに移った。

「どうだろうな」

「鷹ですかね、今は」

「そうじゃないですかね」

「鷹か」

仲間達の今の言葉にふとだ。目を動かしたのだった。

「今の俺はか」

「ええ、そう思いますけれどね」

「見事に飛びましたし」

「そうか。鷹になったか」

その言葉を受けてだ。浜尾は自然に微笑みになった。

そのうえでだ。彼はこう言うのだった。

「鷹になったとしたらだ」

「ええ、鷹になったら」

「どうされますか？」

「その爪と嘴で国を守るか」

これがだ。彼の考えであった。

「絶対にな」

「そうですね。俺達はその為に空にいますから」

「曲芸のチームでも」

それでもパイロット、航空自衛隊のそれであることは変わらない。
ならばだった。

「ですから鷹になって」

「戦いましょう、その時は」

「アメリカにも負けてたまるか」

浜尾はまた言った。

「俺達の国は俺達で守るんだからな」

「その力がありますね」

「今の俺達にも」

「そうですね」

「そうだ、ある」

それは間違いないとだ。浜尾も言った。

「そうなった、やっとな」

「敗戦の時から立ち直って」

「そうしてですね」

「今は」

「ああ、そうだ」

その通りだと言つてであった。そうして。

浜尾はだ。空を見上げた。その青い空をだ。

「あの空は。日本の空は」

「もう一度俺達を守りましょう」

「絶対に」

「長かったがな」

彼は今度はこんなことを言った。その青い空を見てだ。

「それもやっとな」

「俺達がまた守れるようになった」

「自分達のこの手で」

「後は」

仲間達もその空を見上げていた。そして浜尾はまた言った。

「俺達以外の人達もそう思えば。完璧だな」

「そうですね。日本人全体がですね」

「そう思えば」

仲間達も彼の言葉に頷く。浜尾は今ようやく自分がその望んでいたものを手に入れたとわかったのだった。あの時なかったものをだ。

蜻蛉が鷹に

完

2011・1・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253v/>

蜻蛉が鷹に

2011年8月2日03時28分発行